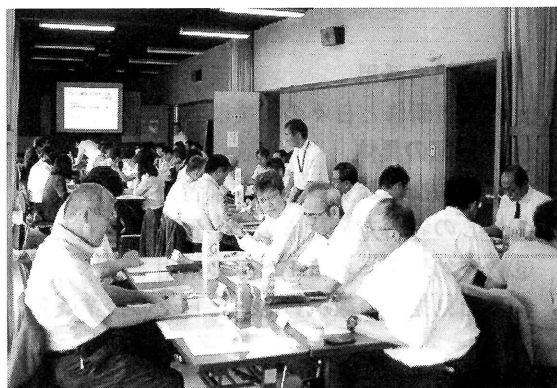


研究課題

知性・創造性を育む

教育課程の編成と校長の在り方



I 趣 旨

学校には、子どもたちに知・徳・体のバランスのとれた「生きる力」を育むことを目指し、知識や技能の習得、思考力・判断力・表現力の育成、そして、主体的に学習に取り組む態度の育成が求められている。また、先行きの不透明感や閉塞感が強まる21世紀を生き抜くために、獲得した知識を活用し、柔軟な思考や粘り強さと先見性をもって解決に当たる能力が求められている。そのため校長は、現状の教育課程の成果と課題を把握し、さらなる改善に向けて積極的に取り組むことが重要である。本分科会では、知性・創造性を育む教育課程の編成・実施・評価・改善を進めるための校長のリーダーシップについて、2つの視点から協議を深める。

視点1は「しなやかな知性と豊かな創造性を育む教育課程の編成・実施・評価・改善」として、教育課程上の課題を明確にし、その解決を図っていく教員の意欲を引き出し、より望ましい学習活動の展開に向けて評価・改善を促す校長の役割と指導性について、視点2は「しなやかな知性と豊かな創造性の育成」として、柔軟な思考や粘り強さ、先見性につながる学習指導と評価の在り方を明らかにしていくための校長の役割と指導性について考えていく。

II 研究発表及び協議

1 研究発表

しなやかな知性と豊かな創造性を培う
カリキュラム・マネジメントにおいて
発揮すべき校長のリーダーシップについて
留萌地区 苫前町立苫前小学校 堀井 理

<視点1：しなやかな知性と豊かな創造性を育む教育課程の編成・実施・評価・改善>

(1) 取組の考え方

小学校においては、「生きる力」の育成が求められ、それは、「知」の側面だけではなく、「徳」「体」との適切なバランスのもとで育成されなければならない。

また、全国学力・学習状況調査からもわかるように、「生活リズム」や「家庭での時間の使い方」が学力へも大きく影響しているため、この状況も踏まえながら、校長は、教育課程全体を見直し、工夫・改善に努め、具現化していかなければならない。

(2) 調査結果から

留萌管内においては、P D C Aサイクルが確立し、地域の「ひと・もの・こと」の活用についても特色を生かした実践が行われている。しかし、学校統廃合が相次ぎ小規模化が進み校種間連携の重要性が高まってきている。

(3) 具体的な取組の視点

- ・「知・徳・体」のバランス
- ・地域との連携
- ・校種間連携

(4) 取組の具体

- ①豊かな心をはぐくむ情報モラル教育の推進
- ②たくましい体を育てる体力向上の取組
- ③人的・物的資源を生かす地域連携
- ④小規模校化を踏まえた教育活動の充実に資する校種間連携

<視点2：しなやかな知性と豊かな創造性の育成>

(1) 取組の考え方

生涯学習社会の基盤となる「確かな学力」の習得だけでなく「豊かな心」「たくましい体」との適切なバランスをとった、これからの時代に求められる資質・能力を意識した教育活動が求められている。

柔軟な思考や粘り強さ、先見性につながる学習活動の工夫・改善・評価の工夫に努め、具体化に向けた校長のリーダーシップが重要である。

(2) 調査結果から

確かな学力を身に付けさせるために様々な取組がなされてきているが、特に課題の発見・解決に向け主体的に・協働的に学ぶ「アクティブ・ラーニング (A L)」の取組を行おうとする回答が多かった。

(3) 具体的な取組の視点

- ・主体的な学びをつなげる学習過程
- ・A Lの考え方を意識した学習形態

- ・ICTの活用
- ・教職員研修と日々の授業改善

(4) 取組の具体

- ①主体的な学びをつなげる学習過程の工夫
- ②ALの考え方を意識した学習形態の工夫
- ③教育効果を高めるICTの活用
- ④先を見据えた教職員研修と日々の授業改善

2 研究の成果と課題

(1) 成果

- ・管内の校長が、「自らの研修」「教育課程の全体計画や課題解決へのビジョンの共有」「教頭・教職員への指導・助言+日々の対話」など、PDCAの各場面でリーダーシップを発揮することによって、「知・徳・体のバランス」のとれた教育課程を練り上げていることが大きな成果である。
- ・論点整理に示された「社会に開かれた教育課程」改善の3つの側面のうち、2つ目の『PDCAサイクルの確立』と3つ目の『地域等の人的・物的資源の活用』について、管内全体で実践されていることが確認できた。

(2) 課題

- ・今後は、次期学習指導要領改定に向けた教育課程の改善に対して、よりポイントを絞った取組が必要となる。特に、論点整理に示された「社会に開かれた教育課程」改善の1つ目の側面である『教科間の相互の関連を図ることによって、それぞれ単独では生み出し得ない教育効果を得ようとする教育課程』についての情報収集と各学校におけるビジョンの模索が今後の大きな課題である。
- ・小学校における「ALの考え方を生かした授業」について、管内の各学校の教職員が日々意識した授業改善に取り組み、それぞれの学校におけるALの考え方を確立すべく、今後も校長のリーダーシップを発揮し続ける必要がある。

3 研究協議

研究発表後の全体会では、ICT機器の整備・使用状況と「教えて考えさせる授業」についての質疑応答が行われた。

- ・パソコンは人数が多い学級分備えられている。実物投影機はまだ少ない。タブレットは6台備えられている。電子黒板はほとんどない。ICT機器の使用頻度は高い。
- ・「教えて考えさせる授業」は一昨年から行っている。前任校も実施していた。レディネス部分をしっかり教えることによって自立解決ができるようになる。

<グループ協議の内容>

<柱1>

- 『知・徳・体』のバランスを重視したカリキュラム
- ・マネジメントにおける校長の指導性について

- ・校長による経営方針の共有化と浸透させるための方策。
- ・「子どもが伸びる」教育課程の編成と参画意識を高めるカリキュラム・マネジメントによる学校力向上。
- ・「知・徳・体」のバランスに対する共通理解とミドルリーダーを中心とした組織運営。
- ・「知・徳・体」のバランスをとるための「体」の部分での少年団活動の活用、「徳」の部分での道徳授業の外部人材活用など。
- ・生活リズムの改善、地域人材の活用など、保護者・地域との連携を図った「社会に開かれた教育課程」の編成。
- ・魅力ある授業づくりと授業の質的向上を図る学習環境整備と研修による教師力の向上。
- ・9年間を見通した小中の連携。

<柱2>

- 主体的な学び・協働的な学びにつなげる学習指導の在り方と校長の指導性について

- ・身に付けなければならない知識・技能や規範意識の定着とを高めるたくましく生き抜くための資質・能力（思考力・判断力・表現力）の育成。
- ・義務教育9年間を見通した教育課程の編成と中一ギャップを解消させる乗り入れ授業、出前授業等の小・中連携。
- ・学びを継続させる小中連携した学習規律、学習形態、指導法研修等の取組。
- ・地域で9年間を支えるコミュニティ・スクールの導入。
- ・主体的な学び・協働的な学びに対する全教職員による共通理解。
- ・授業を効果的に展開させるための実物投影機・タブレット等のICT機器の活用。
- ・特別支援教育に対する専門性の向上とユニバーサルデザインへの共通理解。
- ・日常的に取り組める体力づくりのための環境整備。
- ・地域の自然、人、施設等を活用した体験的活動の充実。
- ・教頭・教諭を「イカス・ホメル・ソダテル」ための校長のリーダーシップ。
- ・教員の資質・能力を育ませる校長のリーダーシップ。
- ・校長自身が学び、行動するリーダーシップ。
- ・極小規模・複式学校における少人数指導、直接・間接指導等の研修。

Ⅲ ま と め

未来に羽ばたく子どもたちが、自らの夢の実現に向かって新たな一歩を踏み出すために、校長としてどのようにリーダーシップを発揮し、教育課程を編成・実施・評価・改善していくのか。留萌地区の実践を足がかりに各地区の取組を交流し、校長の果たすべき役割と指導性を明らかにすべく熱心に協議が進められた。

留萌地区の発表では、教育課程の編成に関わる自校の課題やビジョンを教職員で共有するための校長の働きかけ、教頭や教務・研究部などへの指示・指導、校長自らが最新の教育情報を収集して教職員に提供することの重要性、教職員の意識改革の方策、学校改善を図るための指定校事業や道外視察研修の活用など、多くの実践が紹介され、本分科会の研究課題の解明に迫るものであった。

1 討議1「『知・徳・体』のバランスを重視したカリキュラム・マネジメントにおける校長の指導性」について

- (1) 校長が、子どもの姿や地域の実態から自校の教育ビジョンを示し、教職員とのコミュニケーションを深めて共有することにより、課題解決に向かう教育課程を編成することができる。
- (2) 校長が、ふるさと教育やキャリア教育などの視点から地域の教育資源を活用することの意義を訴え、各教科等の教育内容と効果的に組み合わせることにより、社会に開かれた教育課程を編成することができる。
- (3) 校長が、子どもの姿から課題を明確化し、PDCAの各場面でリーダーシップを発揮することにより、教育課程の改善を図ることができる。

～討議1に関わる課題～

- ・「道徳科」や「英語科」の導入に向けて、校長としてのビジョンを明らかにし、ミドルリーダーを活用するなどして組織的な取組を進めなければならない。
- ・校長同士が連携の必要性を共通理解し、子どもに育成すべき資質・能力を共有して、幼保小連携や小中連携、小中一貫教育へと質的充実を図らなければならない。

2 討議2「主体的な学び・協働的な学びにつなげる学習指導の在り方と校長の指導性」について

- (1) 校長が、指定校事業の受入れや先進校への教職員の派遣などを進めることにより、教職員の意識改革や新たな指導法の導入が進み、授業改善を図ることができる。
- (2) 校長自らが研鑽を積み、示範授業を行うなどして校内研究において教育的リーダーシップを発揮することにより、授業改善が進み、子どもの主体的・協働的な学びにつなげることができる。

- (3) 校長が、次期学習指導要領の改訂に向けた情報を収集し、改訂のポイントを教職員に分かりやすく提示することにより、今求められる学びについて理解が深まり、授業改善を図ることができる。

～討議2に関わる課題～

- ・次期学習指導要領で示される子どもたちに育成すべき資質・能力を育てるため、教科横断的な視点によるカリキュラム・マネジメント等について、校長自身の研鑽と教職員とのビジョンの共有が重要である。
- ・アクティブ・ラーニングの視点から指導方法を見直し、授業改善を図るために、主体的な学び、対話的な学び、深い学びを目指すアクティブ・ラーニングの考え方について教職員の理解を深めなければならない。

※本年度中に次期学習指導要領が告示される予定である。特に、学習指導要領の要であり、教育課程に関する基本原則を示す「総則」が抜本的に改善され、これまでにない形で示されるという。次期学習指導要領が、学校教育を通じて子どもたちに身に付けるべき資質・能力や学ぶべき内容、学び方の見通しを示す「学びの地図」として活用できるように、まず校長が「総則」を読み解き、教職員に分かりやすく示し、ビジョンを共有して、教育課程の改善に向かっていかななければならない。そんな思いを改めて強くした分科会であった。

「第4分科会に参加して」

留萌市立港北小学校 石田正樹

研究発表は、留萌地区苫前町立苫前小学校の堀井理校長先生が研究課題である「知性・創造性を育む教育課程の編成と校長の在り方」についての留萌管内校長会の考え方と実践の発表がされました。特に「しなやかな知性と豊かな創造性」を育むためには、学習指導という1領域で捉えるのではなく、「知・徳・体のバランスのとれた教育課程の構築」が重要であるとし、「教育課程全体の工夫・改善」を視点1、「学習指導の充実」を視点2と設定し、それぞれ4つ、計8つの事例について紹介されました。

グループ協議では、A～Hの8つの班に分かれ、「バランスを重視したカリキュラム・マネジメントにおける校長の指導性」と「主体的な学び・協働的な学びにつなげる学習指導の在り方と校長の指導性」を協議の柱に意見交流がされました。ビジョンの明確化や教職員の意識改革、小中連携や教育資源の活用、ALの視点、TTの活用などをキーワードに活発に協議がされました。学習指導要領の改訂に備え、子どもたちの「生きる力」を如何に育むか、校長としてのリーダーシップを考える良い機会でした。